

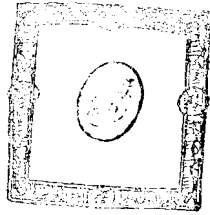
松尾 聰

全釋 源氏物語

卷一



筑摩書房版



金源氏物語 卷一 ©

桐壺・帶木・空蟬・夕顔

定価 一、六〇〇円

昭和三十三年三月五 日初版第一刷発行
昭和四十二年八月二十 日初版第二刷発行

著 者 松 尾 總

発行者 竹之内 静雄

印刷者 多 田 基

發行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京 〇七六五一（代芝）
振替 東京 四 一 二 三

序

源氏物語は日本の古典のうち最高の傑作である。筋によりかゝることばかり多くて、きめの荒い小説は、一時は人目をあざむくことができるけれども、やがては顧みる人もなくて捨て去られる。これに反して筋にはたいした起伏も変化もなく、淡々と語られながら、そのうちのどの一こまを切り取ってみても、人生の真実の血潮がにじみでて、思わず読む者の心を深い感動にさそう小説は千古の生命を保つことができるであろう。源氏物語は、そうした小説であると思う。そうした故をもって千年後の今日にもなお世界の古典として高らかに脈打っている小説なのだと思われる。

源氏物語は又、こうした意味で、ダイジェストが絶対に利^きかない小説であり、一方、本文の抜萃鑑賞が或る程度は利く小説でもあるということにもなるであろう。源氏物語の梗概^{こうがい}本・劇化・映画化がとかく失敗する理由はそこにあり、源氏物語五十四帖^{じゅうし}の手当り次第の一帖が教科書などに用いられて、案外多くの学生たちをいたく感動させる理由もまたそこにあるのであろう。

ダイジェストが不可能である限り、源氏物語を一わたり理解し、自己の生命のかてとするためには、原文のすべてをそのまゝに読みとおす外に方法はないと思う。しかし、原文は千年の昔のことばでつづられていて、そう簡単にすらくと読みとおせるようなわけのものではない。近ごろまでの読者たるものは、読まんと欲してたゞ空しくまどうというのが実情であったといつて過言ではあるまい。にわかには大正から昭和にかけて、吉沢義則並びにその協力者・与謝野晶子・五十嵐力・窪田空穂・谷崎潤一郎・佐成謙太郎らその道の先覚諸氏が異常な情熱を打ちこんで、この物語の口語全訳を、始めて相次いで完成されたのも、そうした当代の読者の悲願にこたえようとされる深い善意と強い責任感とからであつたと思われる。

さてこれらの諸先覚の成果は、それぐきわめてすぐれたものであつて、私など未熟なやからが改めて一本を加えるの理由も意義も全くないに近いのであるが、ひるがえつて考えるのに、それらの諸本はすべて原文を欠いた口語訳本文のみであるか、原文は具備していても語釈を全く省いた口語訳本文専一のものであるかであつて、全五十四帖を通じて本文・口語訳・語釈の三つを兼ねそなへ通常の注釈書の体を整えているものは、ついにまだ一本も刊行せられていないのである。これは不便なことであり、又不可思議なこととさえあるといえよう。私はまずその条件をそなえたはじめての一本を世に提供することが必ずしも無意味ではなからうことを信じ、先年来の書肆のすゝめに従つて、こゝに

思い切ってこの仕事にたずさわることにしたのである。たゞ恐れているのは、私の不才が神品源氏物語をどの程度にまで傷つけないですませるかということである。学窓を出て三十年に近く平安時代の物語研究一すじにつたない歩みをつゞけて来た私ではあるが、源氏物語を読みぬいているなどとは更更いえないふつゝ、か者であってみれば、この憂いは必ずしも杞人の憂いとはいえないであろう。つゝ、しみつゝ、しんで、この訳業に精進するつもりではあるが、大方の読者諸賢からも常に厳しい叱正の声を仰ぐことができれば、私として幸これに過ぎるものはないのである。

昭和三十二年十一月十日

松 尾 聡

凡 例

一、本書は「本文」と「口訳」と「注」とから成っている。「本文」を下段に置き、その本文に当る「口訳」を上段に掲げ、口訳だけでは説明に欠けるところがあると思われる語や句については、本文中のそれらの部分の右肩に漢数字の番号を付し、本文のあとにその番号を頭において、それらの「注」を施した。「口訳」のなかで、歌はすべて（二字下げに組んで）散文訳だけをかゝげたから、下段本文中の原歌を参照されたい。なお「口訳」を本文より大きな活字で上段に組んだのは、一般読者の通読の便を考慮したためであって、他意はない。

一、本文は池田亀鑑博士の「源氏物語大成校異篇」の底本に拠った。源氏物語の伝本には本文のはしぐにおいて若干の異同があり、現在のところ、伝本は、その本文によっていわゆる青表紙本・河内本・別本に三大別されているのであるが、なかで、青表紙本が最も原形に近いものと考えられている。青表紙本は藤原定家が家の本とした一証本であって、「花散里・柏木・早蕨」の三帖は定家自筆の原本が現存しているが、他は散佚してしまつて、その忠実な伝写本も、完全に近い帖数を保有しているものは極めて稀で、大島雅太郎氏藏吉見正頼旧藏飛鳥井雅康自筆本をもつて随一とするといわれる。この本は、大内政弘が、貴重すべき青表紙証本を当時の名筆であつた権中納言飛鳥井雅康（永正六年〔一五〇九〕十月没。）に依頼して、複本作成の意味で忠実に写さしめたものと推定されているが、

現在では、第一帖桐壺・第五十四帖夢浮橋の両帖は別筆であり、浮舟の一帖はこれを欠く。このうち浮舟の欠帖は恐らく偶然の脱落であろう。又、桐壺・夢浮橋の両帖は、もと雅康自筆の両帖を、正頼が家本を重からしめようとて、聖護院道増（近衛尚通の子種家の弟）・道澄（種家の子）に書写を依頼して、その成れるものを以って雅康自筆の両帖と入れかえたものと判定される。こんなわけで、雅康自筆本だけをもつたぐちに底本とはなしたので、池田博士は、花散里・柏木・早蕨の三帖は現存の定家本を用い、桐壺・夢浮橋の二帖、および浮舟には雅康自筆本に次ぐべき地位をもつという池田博士本（佐藤原行能等各筆）を採り、又、初音は雅康自筆本が別本系統の本文を伝えているために、同じく池田博士本を用いて底本としている。但しその他の帖々はすべて雅康自筆本が底本である。一、大底本本文を本書の本文として採用するに当っては、句読点を施し、段落を立て、仮名には適宜漢字を宛て、仮名づかいを正し、会話の部分（ときには心中語の部分にも）には「かぎ」を施して、読みやすいようにした。なお原本本文に「御」をあててある語は、少なくともあるものについては「おほん」と読むべきかとも思われるが、通説に従って、「御とき」を「おほんとき」と読むほかは、すべて「おん」と読んでおいた。但し「御らん」については「ごらん」と読むべきであろう。なお「おまへ・おもと・おまし・おもの」などに限って「御」にあたるものが「お」と仮名書きされることがあるが、「お」につづく語が「マ行」にはじまるものであることから見れば、これらもそれ／＼「おんまへ・おんもと・おんまし」と読まるべきものかもしれない。これら原本本文に仮名書きされている「お」は、本書の本文でも仮名で示した。原本本文に漢字をあててある動詞に送り仮名が添えられていない場合は、ふつうの読みに従い、音便で読むべきかとも思われる「思たまへましかは」なども「思ひたまへましかば」と「ひ」を送って読んでおいた。

一、本書の本文は一切改めないことをもって原則としたが、稀に明らかに誤りと認められるものについては、これを改めて、その旨を「注」に記した。また誤りかと疑われるものについては、その旨を「注」に記すと共に、できるだけ他本の異文を「注」に掲げた。

一、口訳は、いちじるしい不自然感を覚えさせない限りにおいては、逐語直訳を旨とし、みだりに説明のことばを補わないで、原作のおもかげを保持することにとめた。

一、口訳にあたって、現在会話には用いない「である」体を避けて、会話に用いる「ます」体採ったのは、当時の物語は、作者が自ら話して聞かせる代りに書きつづったもので、従って読者は（作者に代って）声に出して他人又は自らに読み聞かせたものと考えられるからである。

一、普通の注釈書では、本文中の会話には、話者の主体を示す人名の略号を付記し、又、口訳文中には、できるだけ主語を補って、読みやすくすることにとめているが、ともすれば原作の味をそこなうことが多いのを考慮して、本書では、本文においては一切そのことを廃し、口訳文においては、誤られやすい場合をのぞいて、できるだけそれを控えた。

一、口訳は現代仮名づかい・当用漢字に従うようにとめた。口訳文の中の「御」は、振仮名を施さない場合は、すべて「い」と読みたい。

一、注は、一般読者が本文理解に必要と思われる範囲内において、なるべくくわしく施すようにとめた。一冊のなかで、同じ言葉に対する同じ注をくりかえしていることがあるが、読者の便を慮ったためである。

一、古来異説のあるものについては、一理ありと判断される限りは、なるべく諸説を注記するように心がけたが、紙

幅の都合上、必ずしもすべてを尽くすわけにはいかなかった。

一、読みさして、再び読みつづけるときの便宜を考えて、各帖のはじめに、その帖の梗概と略系図をかかげた。従って、はじめから読みつづけられる読者においては、梗概は、むしろその帖を読み終えられたのちに、目を通されることを希望する。

一、口訳および注を施すにあたっては、藤原伊行の「源氏釈」、四辻善成の「河海抄」、一条兼良の「花鳥余情」、三条西実枝の「明星抄」、中院通勝の「祇江入楚」、北村季吟の「湖月抄」、契沖の「源註拾遺」、賀茂真淵の「源氏物語新釈」、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」、石川雅望の「源注余滴」、萩原広道の「源氏物語評釈」、池辺義象・鎌田正憲の「源氏物語詳解」、宮田和一郎氏の「頭註対訳源氏物語」、金子元臣氏の「定本源氏物語新解」、島津久基博士の「対訳源氏物語講話」、吉沢義則博士の「対校源氏物語新釈」および「源語釈泉」、麻生磯次博士の「註釈源氏物語」、阿部秋生氏の「新纂源氏物語評釈」、佐伯梅友博士の「源氏物語新抄」、池田亀鑑博士の「朝日古典全書源氏物語」、秋山虔氏の「評釈国文学大系源氏物語」、玉上琢弥氏の「評釈源氏物語」、北山谿太氏の「源氏物語の新研究桐壺篇」「源氏物語の語法」「源氏物語のことばと語法」、谷崎潤一郎氏の「新訳源氏物語」などの学恩を被ることが甚大であった。記して謝し奉る。

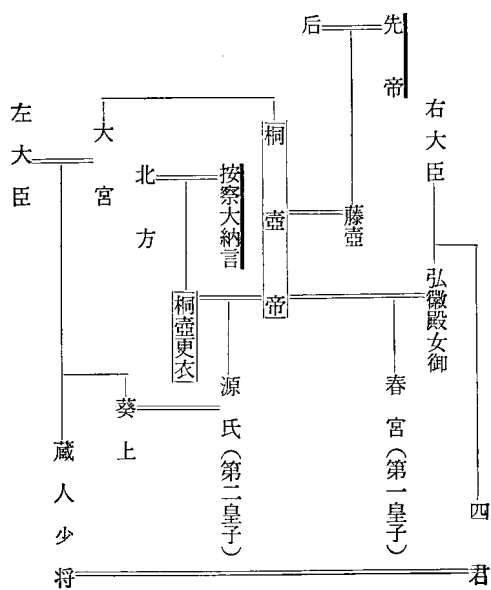
一、諸注釈書の探索・整理その他について長谷川和子氏の援助を得たことが大きい。氏の厚情に感銘している。

一、源氏物語に関する解題は、本文注釈と別に一冊を設けてこれを述べることにする。

桐

壺

(きりつぽ)



どなたの大御代にであつたか、女御更衣方がたくさんお仕えしていられた中で、とりわけて帝の寵愛の深い更衣があつた。桐壺更衣という。周囲の嫉妬をうけて病がちであつたが、玉のような皇男子を生んでからは、帝の御寵愛は一層加わり、周囲の嫉妬もまたそれに伴つて一層激しくなつてゆく。とりわけて、すでに帝の第一皇子を生んだ弘徽殿女御は、新しい皇子が皇太子になるのではないかと不安から帝にとにかく言うので、帝も心苦しく思つておられた。更衣の生んだ皇子が三歳の夏、母更衣の病は重くなつて、帝から強つての許しを得て里に下つたが、その夜死んだ。帝のお嘆きは一通りではない。忌のために母更衣の里に下つていられる若宮を恋しくお思ひになつて、度々人をつかわして様子をおたずねなされる。野分めいて急に膚寒を覚える夕暮には朝負の命婦をつかわして更衣の母君を見まわれ、若宮と一緒に宮中に来よといわれるが、母君は辞退する。帝は食事もおすゝみにならず、政も怠りがちであられるので、世の非難も漸くめだつてきた。月日がたつて若宮は参内した。うつくしい成長ぶりである。翌年の春皇太子決定にあたつて、帝は、若宮に後だてがなく、世間でも納得しまいとお考えから、若宮を立てようとはおくびにも言い出さずにしまわれた。若宮六歳の時、更衣の母君も死んだ。七歳から学問始めをされるが、世にも稀な聰明さであつた。帝は若宮をつれて弘徽殿などにも行かれるので、さすがの女御も疎ましくはできなかった。そのころ来朝した高麗人の人相見に、帝は若宮をひそかに見させたりして、ついに若宮を臣籍に下して源氏にしようと決心なさつた。年月を経ても帝は更衣のことをお忘れになる折とてなく、お氣をまぎらそうとして然るべき人々を参内させなさつたが、なぞらえようもないので、万事が疎ましいお氣持でいらつしやつたところ、先帝の女四宮が桐壺更衣によく似ていられるとお聞きになつて、懇請なさつてこれを迎えられた。藤壺女御と申し上げる。お美しくてふしぎな程更衣に似た面ざしであられた。帝は次第にお心が慰められていかれる。帝は幼い源氏を女御にあわせて、親しくして下さる様に願う。源氏は、亡き母君に似ていられると聞かされて、いつもおそばでお親しみ申し上げたいと感じていた。弘徽殿女御は、また源氏を憎らしいと思ひはじめる。源氏は十二歳で元服、その儀式は東宮のそれに劣らない。元服の夜、源氏は左大臣の娘（葵上）と結婚した。葵上の母君は帝の妹であるのに、今また源氏が婿となつたので、左大臣家の勢は、東宮の祖父である右大臣家を圧した。左大臣には子が多いが、葵上と同腹なのは長男の藏人少将であつた。有望なすぐれた貴公子である。右大臣は、捨てておけず、その四の君に婿と。源氏は四歳年上の葵上をあまり好まない。父帝のおそばで暮すことが多く、心中ひそかに藤壺を慕つてゐる。帝は、桐壺を源氏の部屋と定め、また母更衣の里の邸を大改造させなさつた。源氏はこうした所に、理想の女性をおいて住みたいとばかり思つてゐる。

どなたの大御代おおみよでしたか、女御や更衣がたくさんお仕え申し上げなされた中に、たいして高貴な身分ではない方の、めだつて時めいていらつしやるのがありました。宮仕えのはじめから、自分こそはと自信たつぷりでいらつしやる御方々おんかた々は、とんでもないものとして、おさげすみお憎みなさいます。この方と同じ身分やそれより低い身分の更衣たちは、なおさら心穏かではありません。朝夕あさゆふの宮仕えにつけても、方々かた々の心をゆるがせてばかりいて、その恨みを身に受けたのが積り積つたせいでしょうか、ひどく病が重くなつていつて、なんとなく心細そうな様子でお里がちなのを、主上しゅじやうにはいよく極めてふびんなものとお思ひになつて、人の譏そしりをも気兼ねあそばすこともおできにならず、世の中のためしにもなつてしまひそうなおりあつかひです。上達部かんだちめや殿上人てんじやうびとなども、そうしたところでどうしようもないことながら、目をそむけくして、たいそうまぶしいまでの御寵愛ごうちやうあいの受け様ようなのです。

「唐土もろこしでもこうしたことがもとなつてこそ、世の中も乱れて、

いづれの御時おほんときにか、女御にようこ、更衣かみいあまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我われはと思おもひあがり給へる御方々おんかた々、めざましきものに貶おとしめ嫉み給ふ。同じ程、それより下げ藤の更衣たちは、まして安からず。朝夕あさゆふの宮仕みやつかへにつけても、人の心をのみ動かし、恨を負おふつもりにやありけむいとあつしくなりゆき、物心ものこころ細ほそげに里がちなるを、いよく飽みかずあはれるものに思ほして、人の譏そしりをもえ憚はづらせ給はず、世の例たとひにもなりぬべき御もおんてなしなり。上達部かんだちめ、上人じやうじんなども、いなく目をそばめつ、いと眩くらき人の御おばえなり。

「唐土もろこしにもかゝる事の起りにこそ、世

いけなかったのだった。」

と、次第に世間でも、つまらないことに、人々のもてあましの種になって、果ては楊貴妃の例までも引き合いに出してしまいそうになってゆきますので、たいへん間の悪いことがいろいろありますけれど、もったいない主上のお志の類もないのを頼みにして、宮中での人づきあいをしていらっしやいます。

も乱れ、悪かりけれ。」
と、やうく天の下にも、あちきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきを頼みにて交らひ給ふ。

(一) いつれの御時 御時は「おほんとき」と読みならわしている。「おほみとき(大御時)」の音便。帝在位の間をいう。「源氏物語」以前の物語は「今は昔竹取の翁といふ者ありけり」(竹取物語)、「昔男ありけり」(伊勢物語)、「今は昔、中納言なる人のむすめあまたもたまへる人おはしき」(落窪物語)のような形ではじまるのがきまりであった。なおこの物語の古来の読者は、こゝに在位の帝を、のちに出てくる物語の記述によって、便宜上、「桐壺帝」とよんでいるが、桐壺は愛し給うた更衣の部屋名であって、正しい呼び方ではなく、むしろ「某の帝」であるべきであるが、以下本書でも通称に従っておくことにする。(二) 女御 中宮につぐ天皇の夫人である者の官名。平安中期では、摂政・関白・大臣・上達部などの娘がなるのが普通であった。(三) 更衣 女御に次ぐ女官。元来は天皇が御衣を更える便殿に侍して、その御衣更を司る者の称であるが、女御同様、天皇の夫人となる者もあった。大納言以下殿上人の家などの娘がなるのが普通である。(四) やむことなき 「止む事なし」の意で、「すてておけない」の意から、「高貴だ」の意となる。(五) あらぬが 当時まだ逆接助詞の「が」はなかった——その萌芽はみとめられるが——ので、この「が」はいちおう主格助詞と解されている。たゞ主格助詞の「が」というものは、元来「梅が枝」の「が」のように連体修飾語を作る助詞であったものが、「梅が咲ける枝」(この場合「咲ける枝」を一語と見做せば「梅が枝」と同じ形である)というふうに使われると、「梅が」は「枝」にかゝるのではなくて「咲ける」にかゝるように感じられてきて、

自然主格助詞となつたものと思われる。従つて、中古文では、いつも体言を修飾することばの中の主語の場合にしか用いられないのが普通である。(つまり「梅が咲かむ時」とはいうが「梅が咲かむ」とはいわない。)こゝも「やむことなき際にはあらぬ人」が「すぐれて時めき給ふ(人マタハ事)」ありけり」という事である。(六)時めき給ふありけり「給ふ」の次に「人」が省かれているとする説と「事」が省かれているとする説とがある。前者は「いとやむことなき際にはあらぬ人」が「時めき給ふ人」の形である。すなわち、元来は「うつくしき梅が細き枝(ウツクシイ梅ノ細イ枝の意)」の下の「枝」が「梅」と入れかわつて「うつくしき梅が細き梅(ウツクシイ梅ノ細イ梅)」となつたものと同じである。今それに従つて訳した。けつきよく「いとやむことなき際にはあらぬ人」と「すぐれて時めき給ふ人」とが同格で「ありけり」の主語にたつようにみえるのだから、前の方を「あらぬ人で」と並べる言い方に訳してもよい。後者の「事」が省かれているとする説は「ありけり」に敬意が添つていないから、主語は「人」ではありえないとする立場を主とするものであるが、この程度の身分の人については敬語を問々省く例は、むしろ普通であるし、又、上に「時めき給ふ」とあつて敬意は適当に払つてあるものもあるから、こゝには敢えて添えなかつたともみられるので、必ずしも有力ではない。(七)思ひあがり 自負する。うぬぼれる。(必ずしも悪い意味に使つてゐるのではない。)(八)めざましき 事が意外で目が覚めるばかりだの意。多くは悪い意味に用いるが、稀にはよい意味にも用いる。こゝは前者。(九)同じ程、それより下臈の更衣たちは 以上によつてこの方が下臈でない更衣であることがわかる。これを、桐壺更衣と呼ぶ。「下臈」は身分の低いもの。臈は、もと僧の夏安居(夏三カ月の間、外出せずに修行する事)の回数をかぞえる単位。その数の少ないのを下臈という。「まして安からず」というふうに「安からず」に敬語が添つていないが、北山谿太氏(源氏物語の語法)も説かれるように、述語が形容詞(カリ活も含めて)の場合には敬語を添えないのが普通である。(一〇)あつしく 病重り熱のあるさまをいう、という。シク活用形容詞。(一一)物心細げに里がちなる くだいて訳せば「里へとかく帰つて、何となく心細そうにしている」すなわち「里がちにて物心細げなり」とほぼ同じ意である。連用修飾語が、あとにくる述語の結果をあらわすような例は中古文にも多い。「世の中をかく心細うて過し果つとも、なか／＼人笑へに、かろ／＼しき心つかふな(総角)」「かる／＼しい考えを抱いて却つて人に笑われるようなことをするな(意)」「里」は実家・生家。(一二)飽かず「心に物足りなく思い、執着がつつて」或は「あわれなるものと思うことが、これで十分というまでにゆかないほど」の意に解する考えと、「極めて・甚だ」程の意と解する考えとがある。用例は前者に多いが、後者も稀ではない。今、仮に後者を採つておく